

ラッセルとヴィトゲンシュタイン

伊藤 遼

早稲田大学

本発表の目的は、事実 (fact) と複合物 (complex) をめぐるラッセルとヴィトゲンシュタインの見解の相違についての Michael Potter の理解を批判的に検討することで、「複合物」をめぐる彼らの考え、さらには、「論理学」をめぐる彼らの考えについて、よりより理解を得ることである。

Potter によれば、複合物とは、物が組み合わさったものであり、事実とは物が特定の仕方では組み合わさっているということ、である (Potter 2008, 102)。例えば、テーブルの上のサラダそれ自体は、レタスや豆、きゅうり、アンチョビ、ドレッシングなどを構成要素とする複合物であり、これらの食材が混ざり合っているということは一つの事実である (Potter 2020, 275)。複合物も事実も諸々の構成要素を持つという点は同じである。しかし、両者のあいだの違いは、単に、前者は名前で指示され、後者は文や節で記述されるという点に尽きるものではない。というのも一つの複合物はいくつもの事実に対応するからである。テーブルの上のサラダは、ドレッシングが他の食材に均等にかかっているという事実やアンチョビが野菜の上に載っているという事実など、いくつもの事実に対応する。

事実と複合物のあいだのこうした区別が、前期ヴィトゲンシュタインの立場にとってさまざまな点で重要なものであったことはよく知られたことであろう。「論理定項は何も表さない」という彼の「根本的な考え」は、「文は名前であるという誤った想定」を退けることで得られたものである (4.0312; *Notes on Logic*, B74)。さらに、いわゆる「写像理論」の要点とも言える、要素命題の相互独立性、言い換えれば、諸事態の存在／非存在の相互独立性は、諸事態を構成する諸対象の単純さ、言い換えれば、諸対象のうちに複合物が含まれていないということを要求する (2.021, 2.0211)。そして、このことは、事実を含めた諸事態と複合物とのあいだの区別のもとに成り立ち得ることである。

Potter によれば、『論理哲学論考』にみられるこれら二つの論点、すなわち、複合物と事実の区別、および、複合物を対象として認めないという考えを、ヴィトゲンシュタインは、1913年、*Notes on Logic* がまとめられた時点においてすでに保持していた。しかし、Potter からすれば、ヴィトゲンシュタインがこうした考えをラッセルから受け取ったという可能性はない。これらの考えを当時のラッセルは理解できなかったからである。

本発表のみるところ、複合物をめぐる当時のラッセルとヴィトゲンシュタインの考えは、こうした Potter が提示する説明以上に複雑であり、かつ、彼らの当時の立場を理解するにあたっていっそうの示唆に富むものである。本発表ではまず、以下4つの主張を行う。1) Potter が提示する説明は、二種類の複合物、objectual complex と

discursive complex とそれぞれ本発表が名づけるものを混同したものであり、2) 両者を区別した上で discursive complex のみを「複合物」として念頭に置く当時のラッセルにとって Potter が提示する「複合物」と「事実」の区別は実質を欠くものであった。他方、3) *Notes on Logic* においてヴィトゲンシュタインが提示する、複合物を対象として扱うことを避ける方法は、discursive complex にのみ適用可能なものであり、4) 1915年、ヴィトゲンシュタインは、objectual complex についてもそれを対象として扱うことを避ける方法を模索したが、その結果得られたものが『論理哲学論考』に現れる「定義」の概念である。そして、本発表の最後では、これら4つの主張を踏まえて、ラッセルの「複合物」概念とヴィトゲンシュタインの「複合物」概念の相違点は、それが事実と区別されるべきであるか否かを本質とするものではなく、そもそも論理学において「複合物」の存在を認めるか否かという点にあると指摘することで、両者それぞれの「論理学」に対するよりより理解を得ることを試みる。

文献

Potter, M., *Wittgenstein's Notes on Logic* (Oxford University Press, 2008).

— *The Rise of Analytical Philosophy, 1879–1930: From Frege to Ramsey* (Routledge, 2020).

Wittgenstein, L., *Tractatus Logico-Philosophicus* (Kegan Paul and Trubner, 1922; corrected edn., 1933) (野矢茂樹訳『論理哲学論考』、岩波文庫、2003)